

践における資料としての「語り」の扱い方を批判的に検討し、議論の材料としたい。

報告者の研究実践は、「過去の再構築」という歴史の方法として「語り」を利用するものではなく、むしろ過去に対する現在の認識を理解するために「語り」を分析するものであった。報告の最後では、このような関心が歴史学とどのような対話を可能にするのか、について探りたい。また、この報告が、「オーラル・ヒストリー」の方法論をめぐって議論することの「今日的意味」について考える材料を提供できれば幸いである。

オーラル・ヒストリーと「歴史」の生成 — 北タイ、タイ・ルー社会の事例から —

馬場雄司(三重県立看護大学)

ここでは、移住史をテーマに、オーラルヒストリーと歴史の問題を論じる。具体的には、19世紀に雲南シブソーン・パンナーからタイ北部・ナーンに移住したタイ・ルーを事例とする。従って、ここでいうオーラルヒストリーは、現在生きている人々のライフヒストリーではなく、住民の間で伝承されてきた歴史の語りをさしている。

北部タイへのタイ・ルーの移住については、年代記史料に多少の記述があるものの、その全容を明らかにするとすれば、各村落における伝承の収集が必要である。シブソーンパンナー・ムアンラーから現在のナーン県ターワンパーに移住したタイ・ルーの場合、現地住民の手によると思われる希少な史料が存在する。しかしながら、現地での移住に関する歴史認識は、古文書よりも、故地の形式を踏襲した守護霊儀礼のパンテオンのあり方や、それにまつわる神話、古文書には表れない移住時の英雄伝説によって形作られてきた。

こうしたオーラルヒストリーは、村落開発や観光の進展に従う守護霊儀礼の変化に従って、様々な形で表象されていく。チャオルアンムアンラーの儀礼と呼ばれるこの儀礼は、タイ・ルー3か村によって3年に1度祀られてきたが、儀礼場のある村(N村)中心の地域開発が行われて以降、守護霊の銅像化(1984年、N村)、移住時の首領を祀の祠の建立(1991年、D村)などがなされていった。

1984年の銅像化の際、移住史を記した古文書の現代語訳が出版され、古文書の内容は、ここで一般に知られるところとなった。この現代語訳は、N村を母村とすることなど、古文書にはない内容が付加されている。報告者は、この点を検証すべく、古文書そのものの内容と上記オーラルヒストリーの内容を地理環境や遺跡の分布を参照しつつ、盆地開拓史とからめて移住史の再構成を試みた。その結果、現代語訳によって付加された部分は、ありえないことと考えられた。

しかしながら、こうした外部者によって再構成された歴史は、現地住民の歴史的リアリティーとは異なる。古文書の現代語訳は、N村中心の地域開発に伴う、N村中心の歴史認識のテキスト化である。このことは、儀礼の重要部分を担うD村との軋轢を生み、D村独自の歴史の記憶に基づくモニュメント化(祠の建立)を導き、儀礼は2か所に分裂する。

かつて、歴史学と人類学における「歴史」の扱いに関する議論において、前者は「過去の再構築」目的とし、後者は「現在における過去の認識」を扱うとされたこともあるが、むしろ、「我々の表象」と「彼らの表象」というべきとする議論も出されてきた。同じオーラルヒストリーを用いながらも、外部者による歴史の再構成と、現地での歴史認識とは異なる。本報告では、「歴史」生成の場を描くことで、こうした問題を文字史料とその周辺の問題とからめ

て検討する為の材料を提出したい。

今一つの問題は、オーラルヒストリーの担い手の位置である。オーラルヒストリーの語り手は往々にして老人であるが、近年の急速な社会の変化によって、語り手は、社会の周辺におかれる傾向にある。こうした問題についても触れてみたい。

資料・研究短報

「近代早期東亜海洋史與臺灣島史國際學術研討會」の報告

奈良 修一(東方研究会)

2000年10月26日から27日までの2日間、中華民国台北市にある中央研究院において「近代早期東亜海洋史與臺灣島史:慶祝曹永和院士八十大壽 國際學術研討會」が開催された。これは、副題にあるとおり、曹永和先生の八十才のお祝いのために開催された学会である。中華民国の研究者だけでなく、オランダ、アメリカ、タイ、日本などから多くの研究者が集まり盛大に開催された。

ご存じの通り、曹永和先生は、日本語も堪能であり、オランダ語史料を用いながら、台湾と日本や東南アジアの関係を研究されてきており、多くの著述をされている。現在では、中央研究院の院士として、今なお活躍されている。

その活動は広く海外にもおよび、オランダ・ライデン大学のL.ブリュッセ博士との親交も深い。今回の学会の開催にあたり、多くのオランダ人研究者が参加したのもその関係である。日本からは、加藤栄一先生をはじめ、永積洋子先生など、6名が参加した。

学会は、英語と中国語で行われた。一日4セッション、二日で8セッションが行われ、一つのセッションにそれぞれ二人の発表者とコメンテーターがつき、全部で16の発表が行われた(但し、生田滋先生が参加できなくなり、ペーパーだけとなっている)。

その発表は、以下の通りである。

第一セッション

Leonard Blussé "God, Gold and Gloom, the Limitations of the Dutch Colonial Project in Taiwan(1635-1645)"

加藤栄一 十七世紀前半期東・南シナ海域における鄭一官と連合オランダ東インド会社

第二セッション

奈良修一 "Zeelandia, the Factory in the VOC Network"

Wouter Milde "Bull in the China Shop, Pieter Nuyts in China and Japan"

第三セッション

Paul A. Van Dyke "The Anglo-Dutch Fleet of Defence(1620-1622): Prelude to the Dutch Occupation of Taiwan"

Dhiravat na Pombejra "The Dutch-Siamese Conflict of 1663-1664: A Reassessment"

第四セッション

生田滋 "Portuguese Voyages in the Indian Ocean and Southeast Asia: A Reassessment of the Role of Macao in the Portuguese Trad in Maritime Asia, 1500-1650"

John E. Wills, Jr. "The Dutch Reoccupation of Chi-lung, 1664-1668"